

毎年恒例の卒業式、と同時に春もやってくる。急ぎ足でキャンパス内を通り過ぎていた学生たちの歩調も春が近づくにつれてだんだんゆっくりとしたものになっていく。身を刺すような寒さは頬を撫でる暖かい風に変わり始め、寂しげだった景色も色を持ち始める、そんな中一人の女が急ぎ足にどこかへ向かっていた。

今年この大学で三回目の春を迎える葉月林檎である。周りのゆっくりとした雰囲気には似合わずどこか急ぎ足な彼女の姿は何か追われて焦っているようだった。二日後には卒業式だ、その言葉が彼女を急かしていた。もちろん、林檎自身が卒業生というわけではなく胸の中は後悔でいっぱいだった。毎年この時期になってなぜ慌てるのだろうか？とあきれるほどに毎年思う。やりのこととしたこと、言い残したこと、伝え残したこと、いつも時間切れで“残したこと”で終わってしまう。今年もまた、そうなるうとしていた。

早く歩いたから、急いだから、時間がゆっくり流れてくれるわけでもないし、時間切れの期限が伸びるわけでもない、それでも林檎にゆっくり歩いていく余裕なんてなかった。

前を見ないのも林檎の悪い癖。いつも視線は斜め下。だから、またあの日みたいに繰り返す。同じ場面を何度も何度も。

「よっ、林檎なにしてんの？」

この横顔を何度見てきただろう？この声を何度聞いたんだろう？この匂いを何度感じただろう？あと何回この場面を繰り返すことができるのだろう。

「別にー、特にこれと言ったことは、ちよつと学校に用事があっただけです」

斜め後ろのから声がして、いつの間にか追い越されて、少し裏をついて行く。後ろ斜め約三〇度、彼の表情が見えなくて、自分の表情を見せないポジション。この距離が私たちの変わらない距離だった、三年前の春、出会った時から。

変えようとした、変えたかった距離。でも林檎にその勇気はなかった。もう繰り返すことができないかもしれないこの場面をいつもより遅いスピードで歩く。彼も心なしか林檎にペースを合わせているようだった。まるで、このスピードが彼と離れたくない、離れるのが怖い、時間が止まってほしいと言っている自分の心のようにだと林檎は苦笑いした。

「もうすぐ卒業ですね、つてもう明後日か」

言いたいことはたくさんあった。三年前からずっと積もらせてきた言葉がたくさんある。けれど、いつもと変わらない中身の無い会話。今さら、中身がある会話のやり方が分からなかった。いつも他愛のない話をして、憎まれ口を叩いて、時間が流れて、そういう関係だったから。

「ああ……そうだな。はあ、卒業したくねーな」

「そんなこと言って、これから大変なんですから頑張ってくださいよ」

青い空が憎かった、通り抜ける風の気持ち良さが憎かった、こんなに心地いいと離せなくなってしまう。この季節の後悔は、どの季節の後悔よりもしんどいことを林檎は嫌というほど知っているから。この気持ちを手放せなくなってしまう。もっと、雨が降って寒くて灰色の空の下だったら、嫌な思い出になってくれたかもしれないのに。彼といた時間は、どの記憶も綺麗すぎてとても簡単に手放せるものではなかった。

「そうだ、林檎はどうすんの？ 就職とか」

「んー、ぼちぼちですよ。っていうか考えたくないー」

この人と別れた後の私はどうするのだろう。追いかける人がいなくなった私はどうやって生きていくのだろう。いつも私の斜め前にいた彼がいなくなったとき私の視界はどんな風になるんだろう。それ以上先の未来が林檎には考えられない。

「まあ、いろいろあるけどな。また、話し相手頼むわ。じゃあ、俺はこれで」

自分がもう少し素直ならこの距離は変わっていただろうか？ 自分がもう少し馬鹿なら彼の隣を歩けたのだろうか？ 彼はいつも、斜め後ろからやってきて一瞬間に並んで先に行ってしまう。その背中を追いかける勇気すら林檎にはなかった。怖いもの知らずの林檎が唯一臆病になる瞬間。

今さらどうにもできないことなんてわかりきってる。三年間の片思い。最初に出会ったときも同じだった。三年前の春……、今日みたいな憎いほどの快晴だったっけ。

「あー、林檎!!」

斜め後ろからの声、振り返って目に映ったのは一つ上の先輩だった。林檎にとっては眩暈がするほど遠い人間。今まで付き合ったことのないタイプの人間だった。よく笑い、よくはしゃぎ、よく泣き、よく事件を起こす。そばにいと目がチカチカして頭痛がするよくな、そんな人物だ。自分を隠すのが十八番だった林檎にとってその存在は衝撃意外の何でもない。そんな人間のそばに自分がいたことが、そんな人間と言葉を交わしている自分がある頃は不思議でしかたなかった。出会いたての頃は言葉を交わすのも怖くて、いつも逃げたりして、それもいつの間にかなくなって知らないうちにその距離は埋まっていた。けれど、それ以上の距離は埋まらなかった。

「先輩のばーか」

いつも、先に行ってしまう彼の背中にそういうのがいつしか林檎の口癖となっていた。それぐらい、林檎と彼の距離はいつも、斜め三〇度の繰り返しだった。

次の日は相変ずの快晴だ、どうやらここ数日はこの空模様が続くらしい。卒業式まであ

と一日。どうしたものかとぼんやりしている林檎の携帯電話が鳴る。相手はどうやらサークルの仲間からのようだ。何事かと出てみると「これから遊びに行こう」とのこと。このまま一人でいても考えるばかりでよくないと思った林檎は、元氣なく「行く」と返事した。目が腫れているのは気のせいだと思っただけ。

待ち合わせ場所に着くなりみんなが駆け寄ってくる。いつの間にも仲良くなったんだらうか、この仲間は自分以上に自分のことをどうやら分かっているらしい。

「また、先輩のことで後悔か。おまえのその顔を見るのはもう十回目ぐらいだけど、あんまり気張るもんでもないぞ」一人がそう言う。

「そんなに悩むぐらいなら全部言えればいいのに、逃げてなんにもならないって」もう一人が言う。

私はそんなにわかりやすいのか、と林檎は落ち込む。考えても結論が出ないのは自分が一番知ってる、でもその結論が怖いんだ。考えても仕方ない、どうにかしたいなら動くしかない。でも、怖すぎる。だから……。その日一日、喉が潰れるまでカラオケで歌った。自分の中のモヤモヤとか、言えなかったこととか吐き出すように、歌い叫んだ。明日が卒業式で、もう最後だということをおぼえるように、叫びまくった。

そうだ、本当は自分が被害者のふりをして、自己完結させて逃げているだけ。こうやって自分を壊して、それで納得したような顔して……。いつも他人の恋には前向きなせに、自分の恋には後ろ向き。大人になるにつれて、逃げ方だけは、言い訳だけは上手になった。

卒業式当日、林檎はベッドの中だった。起き上がる気配もない。最後だなんて認めたくない。ずっと変わらない三〇度の距離でいいから、これ以上離れるのが嫌だった。三〇度以上離れるのが嫌だった。ずっとベッドに籠ってたって変わるわけじゃないけれど、見送りになんて、さよならを言いに行きたくない。

そんな時に限って……。しばらく布団を頭からかぶって鼻を吸っていた林檎に呼び出しの電話がきた。昨日のサークル仲間たちからだ。サークルの先輩のお祝いをしたいから来いとのこと。

結局林檎の性格からして断るなんて選択はなかった。足早に大学に向かう。こんな時に限っていつもは遠い大学が近く感じた。大学についてしまえばもう何もかも終わり、そんな気がして林檎の心を締め付ける。着きたくない、そう思えば思うほど、正門はもう目の前で。

「おーい、こっちこっち」

さっき電話をかけてきた奴らが正門の向こう側から手を振っている。この春が近づく空気が嫌いだ、林檎は思う。

「あ、こんな時間にどうした？」

それと同時に斜め後ろから聞きなれたちよつと変わった独特の音が聞こえる。

ぎゅーと締め付けられる心臓。ああ、なんでこんな日にまで斜め後ろから……。

「……………」

ちゃんと言葉を発音することもできない。正装姿であろう彼の足もとしか見ることができない。こんなに辛いなら、出会わせなくてくれればよかったのに。そう思っても今の現実は一ミリも変わるはずはなくて。俯いた林檎は彼の瞳にどういう風に映っただろう。

「あつ！ 隼人先輩、なにやってるんですか？ そんな格好して。卒業式ごっこですか？」

言葉を詰まらせて涙を滲ませていた林檎の後ろで気の抜けた声が聞こえる。その言葉は予想外のものだった。

「は？ 何言ってるの？ 今日卒業式じゃん」

ぼかんとしている林檎の代わりに隼人が答える。しばらくして、大きな笑い声が上がった。

「さすが隼人さん。芸が細かいですね！！ 卒業式の日をとちるなんてさすがすぎます！」
は？ これには林檎も驚きを隠せない。卒業式の日をとちる？ そんなはずはない。

「今日は三月十四日でしょ？ 卒業式だよ。みんなして何言ってるの？」

慌てて林檎も反論する。それを聞いて顔を見合わせる一同。

「え？ 林檎までなに寝ぼけてるの？ 今日は三月十四日で明日が卒業式。いい、今日は一四日だよ」

そんなはずがない。昨日、十四日にみんなでカラオケに行った。それで喉が壊れるまで歌った。その証拠に自分の声は枯れている。証拠を、と思い携帯を取り出す。

「ほら見て、昨日電話してきてカラオケ行こうって！！」

慌てて出された林檎の携帯の十四日の着信履歴には今日の呼び出しの一件だけ。

「どうしたの？ 二人でどつきりごっこでもやってるの？」

隼人と林檎は顔を見合わせる。おかしい、今日は絶対に十五日のはずだ。確かに二人ともしつかりしているかと言われればそうでもないが、さすがに卒業式の日を素で間違えるほど馬鹿ではない。けれど、見れば見るほど不思議なこともある。閑散としている校内、とても卒業式の雰囲気ではない。なにがどうなっているのか、考えてもわからなかった。

「ご、ごめん。頭おかしくなったみたい。ちよつと今日はパスで」

林檎はあたりを見回して、卒業式の日だというのに正装姿の人がどこにもいないこと、あまりに静かな大学を見て混乱していた。そして頭を冷やそうと正門に背を向けて歩き出す。

「え？ ちよ、俺はどうしたらいいんだよ。林檎待ってっ」

そんな林檎を見て、隼人も慌てて後を追う。後ろからは「お幸せに〜」なんてのんきな声が聞こえてくるが二人にとってはそんなことを言っている場合ではない。

「ちょ、ちょっとどういうこと？なんで？私頭おかしくなっちゃったの？」

「待ってれば、俺にも状況つかめてないんだって！」

正装姿を決めた男が、申し分程度に着飾っている女を追いかける図は不思議そのものだ。「だって！私はこの日が来てほしくないって！！ずっとずっと思ってたもん、間違いのはずがない」

林檎は自分が正しいと主張するように大声で訴える。

「落ち着けて、確かに今日は十五日で合ってる。それは俺も思ってることだから、とりあえず落ち着いて」

落ち着いていられるわけじゃないじゃない、こんな状況で、覚悟を決めて家を出てきたら今日は卒業式の前日ですって？ そんなの納得できるわけがない、覚悟の大きさだけ怒りがふつふつと林檎の脳内に広がる。

「先輩付き合ってください！ 緊急会議を開きましょう」

二人は、その格好のままその足で駅前のファミレスに駆け込んだ。まだお昼時にもなっておらず店内は閑散としている。そんななか異様な空気を発する二人は周りから切り離された世界にいるようだった。

「まずは今日の日付を確認しましょう」

そう言って林檎は携帯を取り出し、知り合いに片っ端からかけた。出る相手出る相手に捲し立てるように聞く、最初こそ穏やかにしゃべっていたもののだんだん声が大きくなっていく。どうしてみんな口をそろえて私たちを馬鹿にするのか。

それがしばらく……

「もうよせ、誰に聞いても十四日って返ってくるだろ。俺も昨日の通話履歴がないし、携帯電話の日付表示もどういわけか十四日だ。だから、たぶん十四日なんだ」

「そんな……」

「二人して卒業式の日をとちった。そういうことだろ。それに、お前今日が……えっと明日が来てほしくないってずっと思ってた、みたいなこと言ってたじゃん？なんかやり残したことがあるんだろ、よかったじゃん、猶予が勘違いでも一日増えて」

いつもそうだ。こうやって追い詰められた時も彼は変わらず私の気持ちを交わしていく。鈍いのかわざとなのか、わざとだとしたら相当たちが悪い。やり残したり後悔してるのはお前のせいだ馬鹿野郎！とは言えるはずもなく、林檎は窓の外から見える駅前の通りに視線を移した。

「まあ、頑張れ。生意気な乙女さん。気持ち伝えたい奴がいるんだろ……」

「そうですね……」

なんて胸糞悪い会議なんだ、林檎は思う。だから、私はこいつのことが嫌いなんだ……と。

卒業式当日、林檎はいつもより二時間早く起きて、いつもよりお洒落を決めて、いつもより念入りに髪の毛をセットして、いつもより時間をかけてメイクをした。昨日の緊急会議で逆に踏ん切りがついてしまった。あんな馬鹿のどこがいいんだか、まったくもって意味不明である。告白なんかしてやるもんか！ と林檎は胸に誓い家を出た。

ブーブーブーブー……

コートのポケットに入れていた携帯が不意に震えた。そういえばマナーモードにしたまままだつたなどか思いながら出るとまたサークルの同期からの電話だ。

「林檎？ 起きてるなら聞いてほしいんだけどサークルの先輩のお祝いしたいから……」

最後まで聞く前に電話を切ってしまった。昨日と同じ内容の電話。着信履歴を見てみると三月十四日の今切った着信の一件だけ。

「どうということなの……？」

その疑問は予想通り、大学に早足で行ってみるものの学内は閑散としていて、やはり卒業式当日という雰囲気ではない。予想が当たっていれば後三〇分ぐらいすれば正門の向こうから電話をかけてきたみんなが現れて、後ろから隼人が来る。

三月十四日を繰り返してる？

「おーい、こっちこっち」

どれぐらい考えていただろう、正門前で立ち尽くす林檎を呼ぶ声がする。と同時に……

「林檎？ お前……」

後ろからは予想通り隼人が現れた。昨日と変わらず正装を決めているが、林檎の様子と大学の様子をすこし見比べて異常に気付くのにそんなに時間はかからなかった。

「ねえ、先輩の時間は進んでますか？」

前を見たままの林檎が言葉を発する。

「時間……？」

隼人が腕時計と携帯の日付を確認する。三月十四日。

時間が進んでいない。昨日も今日も三月十四日。同じことが繰り返されている。サークルの仲間から先輩のお祝いをしたいという電話がかかってきて、それは卒業式の一日前で……。携帯の着信履歴も、どこのカレンダーも、朝のニュースも三月十四日を繰り返している。林檎と隼人を除いて。

二人の時間だけは進んでいた、二人の時間ではもう今日は三月一七日である。しかし、世界全体がどういうわけか三月十四日のまま進もうとしないのだ。そして、昨日と同じファミレスにて緊急会議。

「わけわからない、一生三月十四日を繰り返さなければいけないの？」

「そんなわけないだろ……。原因があるんだよ。最近変わったことは？」
林檎は考える。最近変わったこと……。

「んー、特には。そっちはどうですか……？」
隼人も一瞬考えるそぶりをしてすぐに返した。

「いや、相変わらず孤独な日々だけど？」

どうしてこの人はこんな時まで飄々としていて、いつもと変わらず。林檎は繰り返している現実よりも、目の前にいる隼人の姿の方が気にかかってしまう。いつもそうだった、会うたび話すたび、こちらに考えを読ませることもなく自己完結してしまつて林檎は結論に振り回されて。今だつてそんな感じだ……。

「お前、初めてこっち見たな。こんなに正面でちゃんと話すのは初めてかもな」

しばらくの沈黙の後、静かに林檎の正面に座っている隼人が口を開いた。突然何を言い出すんだと林檎の鼓動は早鐘を打ち出す。

「そ、そうかもね……」

一度言われると意識して正面から視線を合わせることなんてできるわけがない。少し赤らんだ顔を林檎は隠すように俯く。やっぱりボロクソ言つても私はこの人のことがどういふわけか好きなのだ、今の鼓動と気分で林檎は確信を持つ。

「ね、先輩。こんな真昼間からですけど、お酒でも飲みませんか？ 今日暖かいですし公園とかで！」

そんな気まずい空気を打ち消すように、林檎は突然声を大にして言う。いつもの隼人といるときの林檎らしくなく、いきなり立ち上がったかと思えば、隼人の方へ周り手をつかんだ。いや、正確には腕をつかんだ。それに驚いた隼人は慌てて腕を引く。

ああ、やっぱり私たちの距離は斜め三〇度のまま。それ以上は近づけないんだ、林檎は何かを諦めたように宙に置き去りにされた右手を自分の左手でぎゅっと握りしめた。もし、可能性があるのなら……少し期待した自分が馬鹿だった。

大学のすぐ隣にある児童公園は、閑散としていた。二人しかいない児童公園で二人はブランコに腰かけた。コンビニで買った酎ハイを片手に。

「先輩は恋愛とかしないんですか？ 興味ないってわけじゃないですよね……」

「ああ、そうだな」

どうしてループに陥って焦るはずの自分たちがこんな会話をしているのか二人にはわからなかった。けれど、なぜか決着をつけなければいけないような気が無意識にしていた。

「過去に、経験とかあるんですか……？」

「どうだろう……」

その言葉のニュアンスから過去に経験があるのだということは容易に読み取れた。林檎は言葉を詰まらせる。

「林檎は？ 好きなやつとか、過去の恋愛とか」

お返しとばかりに隼人が今度は聞き返す。

「私は……しは……」

林檎の過去に恋愛がなかったわけではない。しかし、思い出して言葉にしようとしたところでそれは涙に掻き消された。

あるところに一人の少女がいた。素直でまっすぐで穢れを知らない真っ白な少女。少女はある日恋をした。自分の手を引いてくれるその手に、コーヒーを飲むその喉に、大人の匂いに恋をした。不器用な少女は愛されることを知らない。彼の声が怖かった。彼の笑顔が怖かった。彼の存在が怖かった。彼のそばにいるのが怖かった。何もできない自分がおこがましいときえ思う毎日。そんな少女を嫌うことを彼はしなかった。少女にとってこれ以上怖いことはなかった……。逃げ出してやっとなり返ったとき、少女の耳に入ったのは彼の幸せの知らせ、彼が知らない女性と笑いあう姿。そして、「あの時、振り向いてくれたならなあ……」という言葉。愛されるのが怖い少女は、彼の愛から逃げてしまった。

「おいおい、泣くなつて。そんな辛いなら話さなくていいって。聞いて悪かった」

林檎は気がついたら誰かの腕の中にいた。他の誰でもない隼人の腕の中だ。触れたことなど数えるほどしかない彼の体温は思った以上に低かった。なんか体温高そうな人なのに……。ずっと本当は気づいてた、こうやって彼と距離を置く自分。愛されるのが怖いんだ。自分なんか愛される資格がないって思う。だから、優しくされるのが怖い。

「さっき触れたがらなかったじゃん……、そういうところが嫌いな……！」

しばらくそのまま思考停止していた林檎が離せと隼人を睨みつける。フラッシュユバツ

クするのは触れるのを拒まれた記憶。別に一度や二度の事ではない。そうやって拒まれるたびに平気な振りをするのがどれほど辛いのか……。なのに、たまにこうやって優しくされるのがどれほど辛いか……。林檎が自分の言葉で強く反発したのはこれが最初かもしれない。頬を伝う涙は悲しい味がした。

あるところに一人の少年がいました。少年は引つ込み思案で本を読むのが大好きでした。そんな少年は恋をしました。明るくて煩くて破天荒な少女に恋をしました。ただ、少年は愛し方を知りませんでした。その少女と過ごす日々、自分を変えようという少年は努力をしました。自分を変えてまで愛したい相手だったからです。しかし、彼女は風に吹かれた綿毛のような人でした。少年の前に現れ隣に座るようになってしばらく、挨拶もなく彼の前から消えてしまいました。愛し方が分からない少年は彼女を失って行き場を失った愛を消滅させることで自分を保ちました。愛という感情を忘れることにしたのです。

林檎を抱く隼人の力はさらに強くなる。もう何時間こうしていただろう、日が落ちた公園で泣きながら抱き合う男女。愛するのが怖いんだ。自分の気持ちに気づけないほど馬鹿ではない。ただ、この彼女を抱きしめてしまえば自分が壊れてしまうような気がして、ずっと気づかないふりを決め込んで目を背けていた。林檎も隼人も、お互いに自分が何をしたいのかも、どうしたいのかも結論が出せないでいた。結論なんて出なくていいと思っていてくる彼女がかわいくて。ただ、まっとうなことができなかった。必死でついてくる彼女を待つてしまうと、自分の捨てた感情が押し寄せてきそう、ただただ怖かった。

今、腕の中にいる存在。隼人は確信していた。この存在が自分にとって必要なものであることを、どれだけ憎まれ口をたたいても、そっけない態度をとっても、本心は今確信している感情であっているはずだ。ただ、その感情をどうすればいいのかわからない……。

二人はどれだけ嘘を重ね続けてきたのだろう。自分を守るため、自分が傷つかないため、いくつもの言い訳と建前を一人前に並べて、大人になったつもりでいて、子供よりずっと恋愛の仕方はへたくそで。そんな自分を正当化するために、ひたすら逃げて。

三度目の三月十四日。二人は公園のブランコの隣で迎えた。日付は変わらず三月十四日。しかし、二人の頭の中に日付のことなど一片もなかった。寒い明け方の公園で身を寄せ合う二人。無言の時間が何時間も二人の間に流れた。

「わたし、隼人さんのこと好きです。今までずっと馬鹿にしてたけど好きです」

ふと静かな明け方の公園で少女が声を発した。枯れてかすれて、聞き取るのは困難な小さな声である。

「俺も、林檎のことが好きだ。初めて出会った時から。こんな奴でごめんな……」

それを追うように、少し低いかすれた声が少女の耳に入る。ほとんど言葉として発音されていなかったが、少女は安心したように小さく笑った。

ブーブーブー……

静かに身を寄せ合う二人の耳に、やけにしつかりとした機械音が聞こえる。

「もしもし……?」

それは林檎の携帯の着信音で、相変わらずマナーモードのまま放置されていた携帯だ。相手はサークルのメンバーから。内容は……卒業のお祝いも兼ねて今日みんなでパーティーを開こうとのこと。林檎は、「了解」とだけ返した。

「隼人さん、行きますよ。みんながお祝いしてくれるんですって!」

林檎は立ち上がり歩き出す。

「はいはい、待ってって」

その隣に林檎よりも大きい影が並ぶ。

今まで、後悔でいっぱいだった林檎の心も、モヤモヤで見えなくなっていた隼人の心も今は今日の空のように透き通っていた。

「私、先輩の怒った顔嫌いですが、笑った顔も嫌いですが、そもそもタイプじゃないんですけども好きなんですよ」

隼人の横に並ぶ林檎は今まで言えなかった鬱憤を晴らすようにすがすがしい顔でそう口にする。

「俺も、お前と話すのめんどくさいし、跳ね返りのじゃじゃ馬だし。でも……そもそもタイプなんです」

負けじと隼人も言い返す。虚偽りない本音の言葉。これが二人が本当に言いたかったことなのかもしれない。自分から逃げて、相手からも目を背けていた二人が真っ直ぐに目を合わせた瞬間、今まで気づくことすらなかった大きな壁が動いたような気がした。壁だと思いついていた目の前のそれは、もしかしたら扉だったのかもしれない。

大人になるにつれて好きの種類は増えていく。幼いころは、“好き”ただその感情だけだった。それがいつの間にか、“この人は好きかもしれない”“この人になら好きになられてもいい”“この人は好きになってはいけない”“この人だったら好きになってもいい”。そうして、大人は自分が大人だということを言い訳にして、恋愛から目を背ける。こんな子どもみたいなことやってられるか、と。俺は私は忙しいんだ、と。

例え、子どもの頃のように心惹かれる相手に出会ったとしても、その好きの分類を考えた結果自分に不利だと思った瞬間、全力で嘘をつきはじめる。嘘をつくことでその恋愛から目を背ける。それが一番自分にとって楽な方法だから。

嘘つきな二人に起こった不思議な出来事は、今この瞬間、またどこかで起こっているかもしれない。ふと見回せば、向き合うことから逃げている大人が何人いるだろうか？ そんな彼らにきつと神様はしびれを切らしているだろう。

卒業式の午後……。

いつもの道を歩く隼人と林檎の二人。二人の間に流れる空気は、もうすぐやってくる桜の季節の風のようにふわふわと暖かいものだった。それでも変わらず斜め約三〇度の距離。

「先輩はやくはやく、みんなが待ってますよ」

斜め前を歩く今にもスキップしだしそうな勢いで歩く彼女と、その後ろをやれやれと言った感じに笑いながら続く彼の姿に、二人の未来が見えたような気がした。

愛されることが怖い彼女と愛することが怖い彼、その二人の関係は確実に変わり始めている。何も怖がることなく楽しそうに前を歩く彼女と、それを優しく見守る彼の姿がその答えだ。

終